

7 なし

地域慣行基準

【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	20	目標収量 「幸水」、「南水」：10a 当り 4 t 「豊水」、「二十世紀」：10a 当り 5 t

(1) 特徴及び吸収特性

なしは、水分要求度の高い樹種であるが、耐干性は弱いため、耕土の浅い土壌や保水力の低い砂礫質の土壌では干害を受けやすい。また、耐湿性もさほど強くはない。

なしの生産に適する土壌条件は、有機質に富み、排水性の良い有効土層 50cm 以上、地下水位 70cm 以下の壤土～砂壤土である。土壌反応に対しては、pH5.5～6.0 の微酸性が適する。

「長十郎」、「二十世紀」の年間窒素吸収量は、10 a 当たり **16～17 kg** (収量 3,750kg) であった(富樫、細井ら他)。また、「幸水」のそれは、10 a 当たり **14.2 kg** (収量 3,950kg) であった(南信農試)。これらの窒素吸収量をもとに天然供給量、施肥効率を勘案して窒素施肥量が計算されたが、その後の品種や施肥方法の変化や樹勢、地力の違いを考慮して、既往の窒素施肥量では肥効過多となってきたため、施肥試験の結果などを勘案して施用量が修正され、現行の基準となった。

窒素の**施肥時期**については以下のことを基本とする。①春季に根が活動を開始する時に、土壌中に十分な養分が保持され、吸収できる状態にしておくため、11月に**基肥として年間施肥窒素量の70%**を全面施用する。冬季の積雪の多い地域では流亡が考えられるので11～12月の施肥は3～4月に分肥する。②**夏季は、地力窒素を基調**とし、窒素を効かせるのではなく、切らさないようにする。③礼肥は、果実肥大による樹体の衰弱をいやし、秋根を十分に伸長させ、翌春の生長に必要な貯蔵養分の蓄積に影響が大きい。そのため、果実品質低下をきたさないなるべく早い時期(早生種では収穫直後に、晩生種では収穫半ばの時期)に、残りの**30%を礼肥**として施用する。